

一人一人の力を引き出す

題材と授業をどうつくっていくか

I 研究の内容

【研究の柱】

① 子どもの課題や実態にあった題材と授業づくり

- ・一人ひとりの力を引き出すために、授業をどう作っていくか。
- ・子どもの課題や実態をどのように捉え、どのような力を付けさせたいと考えて題材を設定していくか。

② 子どもの表現活動によりそう支援のあり方

- ・子どもがどこで悩み、どのような工夫が生まれたのか。また、その題材を通して子どもにどのような変容が見られたのかをよみとる工夫を模索する。

③ つながりと広がり、先を見通した実践の積み重ね

1. 研究の柱にそって小中合同で授業案の検討、実践、検証を行う。また一人一実践を行い、授業のあり方を考える。

(1) 小学校の実践から〈9月統一授業研の実践〉

『扉のむこうは〇〇ランド!!』

名取 美和 (大和小4年)

一人ひとりのイメージをいかに広げ引き出すか、題材名や導入部の工夫、課題提示の方法などについて特に検討し、実践研究を行った。題材名のちょっとした違いで子どもたちの受け止め方や展開が変わることなど、改めて考え話し合うことができた。また、互いに交流する「オープンタイム」を設けて表現や友達のよさに気づけるようにしたり、鑑賞活動でデジカメを使って写真に撮る活動を取り入れることで、アングルや構図を考え作品をよりよく見ることにつなげるように工した。

(2) 中学校の実践から〈2月統一授業研の実践〉

『あらわすかたち・つたえるいろ』～モダンテクニックの発想から～

小澤 朋子 (山梨南中1年)

発想力が低下している今、その力を高めること、現代美術のおもしろさや抽象表現への苦手意識を軽減するためのイメージリテラシーを意識した授業提案であった。モダンテクニックを発想のきっかけとして、自分なりのイメージやモチーフを見つけ、それぞれの色・形・質感を意識しながら表現させていった。子どもたちが自分の力で解決することを重視し、そのためにいろいろな材料にふれられるように材料コーナーがしっかり準備され、イメージを触発するような掲示物など教室環境も工夫されていた。また、配慮された言葉がけなど、随所に子どもたちの表現を引きだし、ふくらませるための工夫がみられた。

研究会では、図工・美術の指導について今まで何気なく見ていたものや見落としていたものに気づき、何かを見つけたときに新しい世界(美)が生まれること。図工・美術は子どもたちが自分の力を発揮する場であり、表現の発達段階は自分で発

見することで、次の段階に進めるようになること。松里小のように4つの観点を表示することにより、どう取り組めばよいのか分かるようにすることは有効な取り組みである。といった指導助言をいただいた。

(3) 県教研レポート〈県教研提案実践〉

『わたしは〇〇ミノさん』

古屋 ゆか(東雲小2年)

教室に突如現れたミノムシ。そのミノムシとの生活からヒントを得て、表現に結びつけた題材であった。効果的な導入により、子どもたちは思い思いの材料や用具を使い、それぞれ個性的なミノムシに変身していた。授業の中でお互いに見せ合っ
て評価しあったり鑑賞しあったりすることが、さらに作ることへつながっていく、
鑑賞と制作することが連鎖した展開となっていた。県教研では、子どもの活動の様
子が子どもの言葉や写真などで分かりやすくまとめられた学習カードに関心が寄
せられた。

2. 実技研修を実施し、授業へ還元する。

「焼成粘土をつかったの表現方法と制作指導の実際」として勝沼焼窯元「土夢」
の広瀬ひとみさんを講師にお願いして、半日をかけての実技研修を行った。土の
種類や用具の扱い方、成形のポイントなど実際に体験して見ることで、授業時に
予想される子どものつまづきや必要な支援、知識など学ぶことができた。

3. 研究会会場を持ち回り、各校の学習環境や展示状況を参考にする。

実践作品や各教室の展示、図工室の材料や用具の準備の仕方など、作るだけで
くいかに学習環境や鑑賞の場を作るか等を参考にした。

II 成果と課題

1 成果として

- (1) 小中合同で研究していることにより、図工から美術へのつながりという大きな視
点を意識して研究できた。それにより発達段階をふまえ、それぞれの段階でつけ
させたい力をより明確にすることができた。授業研や県教研への取り組みはもち
ろん、各自が一実践を報告し討議することにより、部会員全員が研究に関わるこ
とができた。結果、テーマに沿った研究の深まりと広がりが見られ、大変充実し
た研究会になった。外部から講師を招いての学習会もよい機会となった。題材の
提示の仕方や学習評価の4観点を表示する方法の有効性を改めて確認できた。
- (2) 会場を持ち回りにすることも、各校の掲示や学習環境などの工夫等を実際に見聞
することで鑑賞学習や環境づくりの参考にすることができた。
- (3) 夏季学習会で実技研修を取り入れることで、指導法や指導上の留意点などをより
具体的に学習することができた。

2 課題として

- (1) 図工美術の時間の削減や中学校の専科不在などのため、部会で研究した内容や教
科の特性などについての考えが十分に理解され広まるまでいたっていない。各校
に還元し広めていくための工夫や方法を考えていかなければならない。
- (2) 新しい表現方法や技法・指導法について常に学んでいくためにも、実技を通して
体験し経験を積みながら研究していく必要がある。
- (3) 統一授業研の時期や方法について、もう少し実状に応じた対応が必要である。

(部長 広瀬 きよ美)